平成７年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

屋敷田遺跡
上大谷地内
草生津遺跡

1996

新潟県加茂市教育委員会

平成７年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

屋敷田遺跡
上大谷地内
草生津遺跡

１９９６

新潟県加茂市教育委員会

序

これまで加茂市で確認されている遺跡は約160余りになっています。これらの遺跡の大半が、未調査でありますが、近年の各種開発がこれらの遺跡所在地で計画されることが多くなり、遺跡保護と開発との調整が問題になってきました。これまでにも、工事中に土器などが出土し、緊急的に調査が実施された水源池遺跡や千刈遺跡などがありますが、残念ながら遺跡全体を把握することはできませんでした。その後、ようやく当市でも遺跡保護の体制を整えながら、数回の発掘調査が行われ、地域の歴史を語る貴重な資料が得られはじめています。

遺跡は、全国各地のいたるところに存在しますが、その土地、地域のいろいろな条件によって特色があり、興味深いものがあります。私たちの祖先が残した遺跡は、本当に身近なところにあります。それゆえに、様々な開発と遺跡保護を巡って問題が生じることが多くあります。私たちは、これらの問題に適切に対処する必要に迫られていると言えます。

加茂市教育委員会では、各種開発の事前調査として国・県の補助金を得て、市内遺跡確認調査を実施することにしました。どんな遺跡がどのように存在するのかを確認し、各種の開発に対応することを目的にしています。

本年度の調査中、上条の屋敷田遺跡では、僅かですが中世の土器や古銭の出土があり、上条地区の歴史に新たな発見がありました。七谷地区では、遺跡を破壊することなく工事が実施できることが明らかになりました。本書はこうした事業のささやかな報告でありますが、地域の歴史を理解する一助となり、遺跡に対する理解が深まれば望外の喜びであります。また、今後とも地下に眠る埋蔵文化財、遺跡を保護するために、この事業を継続させ、加茂市の歴史を豊かに描きだす努力を続ける所存であります。多くの皆様方のご理解・ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

最後に、本事業に格別なるご指導とご支援をいただいた、県教育庁文化行政課をはじめ、調査にご協力いただいた事業者、地権者及び工事関係者に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成8年3月

加茂市教育委員会
教育長　土　佐　　弘

例　言

1．本報告書は、平成７年度に実施した新潟県加茂市内に所在する屋敷田・草生津遺跡ほかの確認調査の記録である。

2．これらの調査は、屋敷田遺跡が宅地造成事業に、上大谷地内・草生津遺跡が県営中山間地域農村活性化総合整備事業に係り、遺跡の取り扱いの事前協議資料を得るために実施したものである。

3．確認調査の経費は、国庫及び県費の補助金交付を受けた。

4．調査は加茂市教育委員会が主体となり、実施した。調査体制は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教育長	土佐　弘
総括		社会教育課長	田澤弘一
管理		社会教育課係長	土田孝次郎
庶務		社会教育課主事	塚野正明
調査担当		社会教育課主事	伊藤秀和
作業員	石田藤治　今井俊雄　小柳勝次郎　坂上ハツエ　茂岡政子　田浦正雄　田浦寿美　田浦マツエ 高井チヨ　中村耕治　長谷川善四郎		

5．本調査により出土した遺物や図面・写真などは加茂市教育委員会が一括して保管している。屋敷田遺跡の遺物は「ヤシキダ」と出土トレンチ・日付を注記した。

6．整理作業は武田陽子の協力を得て伊藤が行った。本報告書の編集・執筆はすべて伊藤が行った。

7．図版１の空中写真は、（財）日本地図センター発行で米軍が、昭和23年11月に撮影したものを使用した。縮尺は約１／16,000である。図版３の空中写真は、（財）日本地図センター発行で建設省国土地理院が昭和40年10月に撮影したものを使用した。縮尺は約１／20,000である。

8．本書で示す方位は、第５図が磁北、それ以外は真北である。磁北は真北から西偏約７°１０′である。

9．本書に掲載した遺物は通し番号を付し、実測図と写真の番号は同一としている。

10．発掘調査から本書の作成にあたり、下記の諸氏・機関から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。（敬称省略・五十音順）

青山誠八　安藤正美　石原正敏　大橋信彦　小田由美子　小野塚徹夫　金子拓男　金子正典　駒沢悦郎
関口　満　関　正平　高橋　保　高橋雅弘　高花宏行　田畑　弘　田村浩司　鶴巻康志　寺崎裕助
鳴海忠夫　長谷川昭一　藤田豊明　水澤幸一　八百枝　茂　加茂市シルバー人材センター
(株)小柳建設　新潟県教育庁文化行政課

目　次

Ⅰ　序　説……1
1　はじめに……1

Ⅱ　屋敷田遺跡……2
1　調査地……2
2　調査期間……2
3　調査面積……2
4　調査に至る経緯……2
5　遺跡の位置と環境……2
6　発掘調査の概要……4
7　出土遺物……6
8　調査の結果……6

Ⅲ　上大谷地内……7
1　調査地……7
2　調査期間……7
3　調査面積……7
4　調査に至る経緯……7
5　遺跡の位置と環境……7
6　発掘調査の概要……7
7　調査の結果……7

Ⅳ　草生津遺跡……10
1　調査地……10
2　調査期間……10
3　調査面積……10
4　調査に至る経緯……10
5　遺跡の位置と環境……10
6　発掘調査の概要……10
7　調査の結果……10

Ⅴ　まとめ……12
引用・参考文献……12

挿図目次

第1図　調査地位置図（S＝1／200,000）……1
第2図　屋敷田遺跡と周辺の遺跡（S＝1／25,000）……3
第3図　確認調査トレンチ設定図（S＝1／2,000）……3
第4図　土層柱状図（S＝1／40）……5
第5図　5トレンチ遺構配置図（S＝1／80）……5
第6図　屋敷田遺跡出土遺物実測図（S＝1／3、1／1）……5
第7図　上大谷地内・草生津遺跡と周辺の遺跡（S＝1／25,000）……8
第8図　確認調査トレンチ設定図（S＝1／2,000）……9
第9図　土層柱状図（S＝1／40）……9
第10図　確認調査トレンチ設定図（S＝1／2,000）……11
第11図　土層柱状図（S＝1／40）……11

写真図版目次

図版1　屋敷田遺跡周辺の空中写真
図版2　屋敷田遺跡の発掘調査と出土遺物
図版3　大谷地区周辺の空中写真
図版4　上大谷地内の発掘調査
図版5　草生津遺跡の発掘調査

Ⅰ 序　説

1．は　じ　め　に

新潟県加茂市は、新潟県のほぼ中央部、新潟市の南方約30kmに位置する。市東部を村松町、南部を下田村、西部を三条市、北部を白根市、田上町と境を接している。市域は東西に細長い形状を呈し、東西約17km、南北約8㎞、面積約133.67㎢を測る。加茂川は粟ケ岳（1,293m）を源ととし、七谷地区で小乙川・高柳川・大谷川・西山川などの支流を合流させ谷底平野を抜け、市域を北西流する。加茂川流域並びにその支流沿いでは段丘地形の形成は未発達であるが、ほとんどの段丘面上に縄文期の遺跡が点在する。市街地は東山丘陵沿いから加茂川の扇状地形に展開し、その地形ゆえに水害に度々見舞われてきた。現在、市街地は扇状地を占拠し、続く沖積低地部へ拡大しつつある。加茂川は加茂新田地区で信濃川に流入し、信濃川以西に須田地区が存在する。須田地区は、一面低平地であるが、集落は幾度か流路を変遷させた信濃川の自然堤防上に立地している。

屋敷田遺跡は、加茂川が山間地を抜け扇状地形を形成し始める中流域右岸で、前山南麓に位置する中世期の遺跡である。草生津遺跡は大谷川左岸の段丘面上に形成された縄文期の遺跡である。これらの遺跡に対し、前者は宅地造成事業、後者（上大谷地内を含む）が県営中山間地域農村活性化総合整備事業に係ることが判明したため、平成７年10月－11月にかけて範囲確認調査を実施したものである。これまでにも、加茂市において数回の発掘調査（確認調査を含む）や分布調査が実施されているが、各種の開発行為に対して国および県の補助金交付を受けて遺跡の実態把握を行う事業は今年度が最初である。今年度以降も当事業を継続させ、埋蔵文化財保護のため開発側との協議資料を得ることを目的に実施していく予定である。

第１図　調査地位置図（S＝1／200,000）

1．屋敷田遺跡　2．上大谷地内　3．草生津遺跡
国土地理院発行地勢図「新潟」1：200,000 平成８年

Ⅱ　屋敷田遺跡

1．調　査　地　加茂市大字上条字屋敷田722-1

2．調 査 期 間　平成７年10月16日～10月17日

3．調 査 面 積　調査対象面積約3,740㎡　実質調査面積約60㎡

4．調査に至る経緯

屋敷田遺跡は、従来上條館跡とされ周知化されていた。後述する調査結果などから、上條館跡とされていた本地点を屋敷田遺跡と改称したわけであるが、そもそもこの上條館跡が周知化されたきっかけは、昭和58～61年度に新潟県教育委員会（以下、県教委）が実施した「新潟県中世城館跡等分布調査」に際し、調査員が埋蔵文化財包蔵地調査カードに記載し、遺跡と認定したことであった。特に遺物は採集されていなかったが、本遺跡北側後背に存在する上条城跡との関係を考慮してのことであったと想像される。一見、不確実な遺跡登録ではあるが、この思い込みとカード記載が遺跡発見に結びついたと言える。調査員の卓見に敬服するばかりであり、遺物採集可能なところのみを遺跡と判断しがちな私たちに大きな課題を投げかけているようでもある。

その後、この上條館跡地内の旧蒲原鉄道線路敷において都市計画道路造成計画が実施されるにおよび、市教育委員会（以下、市教委）は平成６年度に第１次・第２次上條館跡確認調査を行った。その結果、やはり館跡を示す遺構などは発見されなかったが、中世陶器や木製品などが字舞臺地内において検出されるに及び、中世期の遺跡が存在することが改めて実証された。この調査結果から字舞臺地内を上條館跡から舞臺遺跡と改称し、平成７年度末から本発掘調査を実施している。よって、ここに報告する調査は、第３次上條館跡確認調査となる。

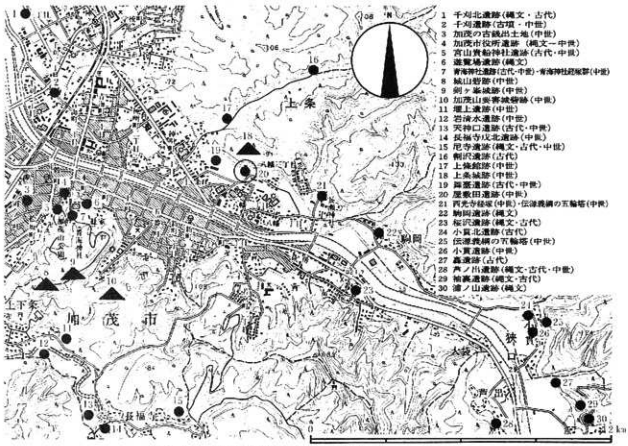
平成７年７月初旬に市建設課から、加茂市大字上条字屋敷田・字久保田・字舞臺地内の現況水田部分における仮称舞台団地造成計画（約13,000㎡）に係り、埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。市教委は、周知の遺跡である上條館跡が存在することから、文化財保護法第57条の３の通知と確認調査が必要の旨返答した。事業課は用地買収前に遺跡の在否を確認した上で、計画を再考する方針であり、用地買収後の調査はあり得ないこととなった。その後、事業課と協議を重ねると同時に遺跡確認調査の承諾書を各地権者から得るべく説明をして歩いた。はたして、地権者の方々からは色よい返事をいただけなかった。掘削により水田床土を傷めること、来年の作付けへの影響を憂慮されたことなどが主な原因であったが、確認調査の結果によっては事業が中止になるやも知れず、埋蔵文化財保護の複雑さを実感することとなった。それでも、字屋敷田地内の地権者の方から現在作付けしていないこともあり、確認調査の承諾をいただけることになった。

これを受け、調査計画の立案などを行い、加茂市は確認調査可能面積約3,740㎡についてのみ事業計画を変更し、平成７年10月４日付け建第1264号で文化財保護法第57条の３第１項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を、市教委は平成７年10月11日付け民資第109号で文化財保護法第98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知をそれぞれ文化庁長官宛に行い、調査の準備に入った。

5．遺跡の位置と環境

（1）遺跡の位置

屋敷田遺跡は新潟県加茂市大字上条字屋敷田722-1ほかに所在する。現況は、水田・宅地などで、加茂川中流域右岸の沖積低地に位置する。標高は約16～20ｍを測る。本遺跡北側山頂部の上条字前山には戦国期の砦を留める上条城跡が存在し、その直下にあたる。上条城跡最高所との比高は約74～78ｍである。また、現在の加茂川流域までは約400ｍの距離である。



第２図　屋敷田遺跡と周辺の遺跡（S＝1／25,000）

国土地理院発行地形図「加茂」１：25,000　平成２年

第３図　確認調査トレンチ設定図（S＝1／2,000）

（2）周辺の遺跡（第2図）

本遺跡が位置する上条地区はこれまで、比較的確認された遺跡は少なかった。しかし、平成7年度に県教委主催で行われた詳細分布調査で新たに数カ所で遺跡が確認されるに及び、上条地区の歴史的景観も豊かになりつつある。ここでは、加茂川中～下流域右岸の遺跡について概観しておきたい。

加茂川中～下流域は両岸とも段丘の形成が顕著ではないが、僅かな段丘面上のところには駒岡遺跡（22）・桜沢遺跡（23）・袖裏遺跡（29）・浦ノ山遺跡（30）・芦ノ出遺跡（28）など縄文～中世の遺跡が所在している。地形的制約や遺物量などから大規模な遺跡とは考えられないが、比較的狭小な地域で断続的にしろ連綿と続いた人間の営みが窺える。縄文時代以降続く弥生時代の遺跡は、加茂市では未発見である。次の古墳時代は加茂地区の平野部を中心に確認されつつあるが、千刈遺跡（2）は古墳時代後期の多量の上器を出土した遺跡として著名である。古代では、本遺跡南東約600mにある延喜式内社に比定される長瀬神社との関係が注目されるが、先の段丘上や谷奥部に僅かに須恵器・土師器が採集できる程度となり詳細は不明である。

中世では、上条城跡（18）が構築される前山周辺を中心に数カ所で遺跡が確認されている。まず、上条城跡は近年鳴海忠夫氏によって縄張り図が作成され、城の詳細が明らかになった（鳴海1994）。それによれば、本城は「城域は東西約500m」、「本城跡の構造は郭群を一直線に配置した連郭式の縄張り」で、「戦国期城郭としての特色を良く残す」とされる。さらに、鳴海氏は本城北麓と南麓に所在する館跡推定地を城の縄張りや地籍図等から検討し、字舘ノ腰地内に60m×60mの規模で方形単郭式の上条館跡（17）の存在を指摘した。南麓の舞遠遺跡（19）では、確認調査の際、珠洲焼や漆器などが出土している。これら、前山周辺の遺跡が年代的にどのような関連性を持って存在したのかは、今後の課題である。そして、本遺跡南東約600mにある西光寺には、出土地点は明確ならざるも珠洲焼擂鉢Ⅰ期の所産と思われる壺と片口鉢、刀子3口が保管されている（21）。経塚出土品と思われる。また、西光寺裏手墓地内に伝源義綱の墓とされる五輪塔が所在する。先の千刈遺跡では、白磁や珠洲焼片なども出土しており、中世前期の遺跡であった可能性が高い（伊藤1995）。

ちなみに、上条地区の文献上の初見は、建武3年（1336）11月1日の足利尊氏御教書写に「越後国青海庄内上条本村」と見える。次いで、文和4年（1355）4月2日の羽黒義成軍忠状に「今月2日青海庄賀茂口於陣峰、致散々合戦追落畢」と村域西端が戦場と化したことが窺える（関1986）。

6．発掘調査の概要

調査は、開発計画用地内に任意のトレンチを5箇所設定し、バックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。トレンチは2×5mを原則としたが、トレンチ5のみ遺構の検出状況から若干範囲を拡張した。実質調査面積は約60㎡であった。

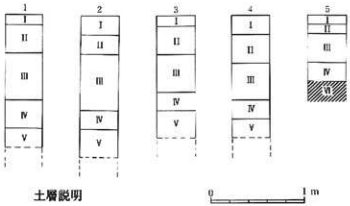
なお、埋め戻しには、砂を入れて転圧し、耕作などに支障のないよう留意した。さらに、地権者からの要望で掘削箇所を明示するため竹棒をトレンチ四隅に設定した。

トレンチ1・2

トレンチ1・2からは、遺構・遺物ともに検出できなかった。土層はⅠ層表土、Ⅱ層暗茶褐色土（耕作土）、Ⅲ層茶褐色土（床土）、Ⅳ層暗茶灰色粘質土である。

トレンチ3・4

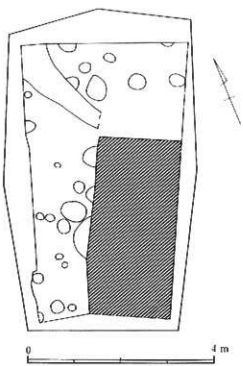
トレンチ3・4からは、Ⅴ層の暗灰色粘質土中で旧河川ないしは溝跡と思われる遺構を検出した。両トレンチの所見から本遺構は東西方向に向かって展開することが窺えた。また、トレンチ3では北から南に向かって穿たれたと思われる木杭も数点検出された。トレンチ3では土師器1点、トレンチ4では土師器4点・植物遺体などがⅤ層中より僅かではあるが出土した。この杭列は護岸ないしは水利灌漑施設とも考えられる。



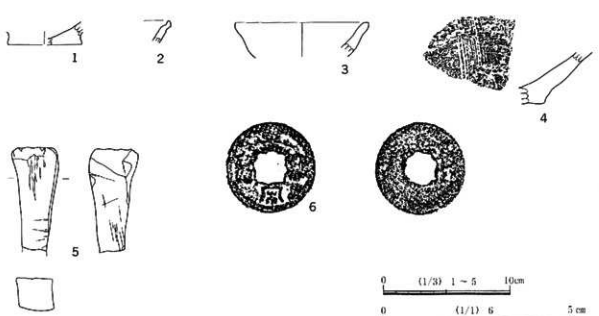
土層説明

I層　表土
II層　暗茶褐色土（耕作土）
III層　茶褐色土（床土）
IV層　暗茶灰色粘質土
V層　暗灰色粘質土
VI層　黄白色粘質土

第4図　土層柱状図（S＝1／40）



第5図　5トレンチ遺構配置図（S＝1／80）



第6図　屋敷田遺跡出土遺物実測図

トレンチ5（第5図）

トレンチ5ではトレンチ1～4とは明らかに様相を異にする。現地表下約60cmのⅦ層とした黄白色粘質土中にて、ピット24基・土坑1基・溝1基などを検出した。遺物包含層は存在しないが、遺構直上から数点の遺物が出土した。調査範囲が限定されているため、建物の想定は不可能であったが、先の遺構から集落の一部にあたるものと考えられる。

7．出土遺物（第6図）

出土遺物はごく僅かで、細片が多い。各トレンチ毎の内訳は、トレンチ3が土師器1点、トレンチ4が土師器4点・植物遺体2点、トレンチ5が土師器1点・珠洲焼1点・石製品1点・銭貨1点である。ここでは、図示可能な6点について説明する。

1は土師器小皿の底部と思われる。底部径約6cmを測る。トレンチ3出土である。

2は土師器皿の口縁部片と思われ、内面端部が窪む。

3は口径約11cmを測る、土師器小皿の口縁部片である。やや外反し、端部付近で若干丸みを帯びる。厚手の作りで、明褐色を呈する。2、3ともにトレンチ4出土である。

4は珠洲焼のすり鉢である。卸目は2.2cm幅の12条単位で、やや間隔を開けて施されるようである。焼成は甘い。吉岡氏の編年（吉岡1994）のⅣ期（14世紀）に概ね、比定されよう。

5は石製品である。その形態などから砥石と考えられる。その使用による磨滅によって、中央部が細く括れる分銅形を呈している。幅0.2cm前後の溝を持ち、長軸方向での4面の使用が考えられる。現在長8.3cm、幅2.0～3.7cm、重さ92.5gを測る。石材は凝灰岩製である。

6は銭貨である。銭名は錆のため判然としないが、下の「宋」の文字から初鋳年1039年の皇宋通寶と判断できる。篠害体である。4～6はトレンチ5出土である。

8．調査の結果

屋敷田遺跡は、上条城跡南麓の低地に所在し当初は上条城跡と関連付けられ館跡ではないかとされていた。しかし、今回の調査対象地からは、館跡と判断できるものは検出できなかった。検出した遺構は、旧河川ないしは水路とピット・土坑・溝など居住地の一部であった。旧河川ないしは水路と思われる遺構には杭列が確認でき、出土した遺物から中世期に機能していたことが窺える。事実、本年度末から実施している舞台遺跡の発掘調査では、同様の遺構から中世期の遺物が多数出土していることから、本遺構確認範囲内も当然調査が必要になるであろう。トレンチ5付近は遺構・遺物から集落の一部と考えられるが、詳細は今後の調査に委ねられている。恐らく、本調査区東側にも遺構が存在することは確実であろう。

遺跡の詳細な年代は資料不足のため不分明であるが、いまのところ14世紀代の遺物を若干検出したに過ぎない状況である。しかし、舞台遺跡からはトレンチ3・4と類似した遺構から、12～13世紀代の遺物が一定量発掘されていることから、トレンチ3・4出土の土師器は若干、年代が古くなる可能性がある。上条城跡が戦国期の特徴を良く留めていることから、屋敷田遺跡が平時の居住地であった可能性は低いが、上条城跡構築前段階の母胎を示す遺跡であったのではなかろうか。このことについては、本発掘調査の結果を待って検討したいと考えている。

いずれにしても、本遺跡は上条城跡直下に展開する遺跡群のひとつであり、また、時期的に先行する可能性もあることなどから、上条地区の中世、ひいては開発史を考える上で、重要な遺跡である。本遺跡が上条城跡さらには他の中世期の遺跡とどのような位置関係で結ばれていたのかなど本発掘調査に課せられた課題は多い。

Ⅲ　上大谷地内

1．調　査　地　加茂市大字上大谷字沢相242ほか

2．調 査 期 間　平成７年10月23日～10月24日

3．調 査 面 積　調査対象面積約8,500㎡　実質調査面積約160㎡

4．調査に至る経緯

昭和60～61年度にかけて市教委は、本調査地域を含む七谷地区約1,044haにおいて、国営加茂東部地区総合農地開発事業が計画されるに及び、該当区域の詳細分布調査を実施している（川上ほか1987）。該事業は中止となり、遺跡の調査も行われなかったが、この際、本地点は遺跡として取り扱われていない。

その後、平成６年度中に当該事業課の農林課から、大谷地区における県営中山間地域農村活性化総合整備事業計画の存在を聞き及んだ。当該事業は平成８年度から５ケ年計画、約81haという広大な面積を対象に行うものであり、当該地域には周知の遺跡が数カ所存在することから、埋蔵文化財との早急な調整が必要になった。

市教委は、平成７年度予算に当該事業に係る確認調査費を計上し、稲刈り後調査に着手することにした。平成７年度に入ると、事業計画も具体化し工事内容も明らかになった。市教委は三条農地、市農林課と協議を行い、本年度中に上大谷地内の溜池造成地ならびに後述する草生津遺跡地内の農業集落道路建設部分において確認調査を実施してほしい旨の依頼を受けた。溜池造成地はいわゆる周知の遺跡ではないが、開発面積や周辺の遺跡などを考慮し、確認調査を実施することにした。その後、土地所有者への説明会を行い、承諾書を得、稲刈り後に調査を実施した。

5．上大谷の位置と環境

大谷地区は加茂川の支流、大谷川沿いに展開したところで、七谷地区内において最も米の収穫量が多い地域でもある。文字どおり大きい谷で、可耕地に恵まれている。上大谷は村松町境よりのところに位置し、別名を鳥越と呼ばれる。大谷川は上大谷に源を発し、左岸に段丘地形を形成している。段丘上には縄文期の遺跡が存在するが、他時期の遺跡はあまり確認されていない。現状では、低地部にほとんど遺跡が確認されていない。本調査地点は、沢状地形の開口部に近く、現況は水田である。

上大谷地区の遺跡は、本調査地点近辺の丘陵緩斜面で鉄滓が採集され、一次製鉄址と見られる石五郎屋敷遺跡（16）、真言宗東龍寺跡と伝わる寺屋敷跡（15）、段丘上に位置し、フレークなどが採集されている田中屋敷遺跡（14）が確認されている。この他にも、字中道の丘陵縁辺～段丘上にかけて縄文期の遺跡が存在する可能性が高いものと考えられる。

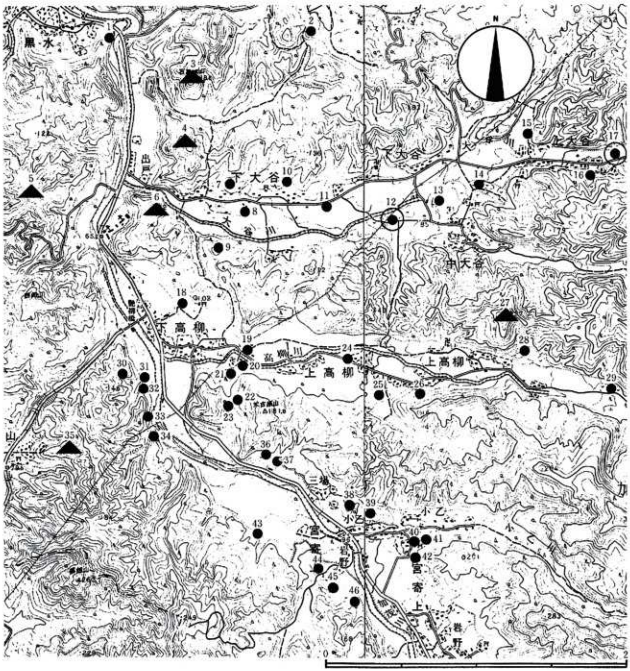
6．発掘調査の概要

調査は、開発計画用地内に任意のトレンチ（２×５ｍ）を16箇所設定し、バックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。

なお、埋め戻しには、砂を入れて転圧し、耕作などに支障のないよう留意した。

7．調査の結果

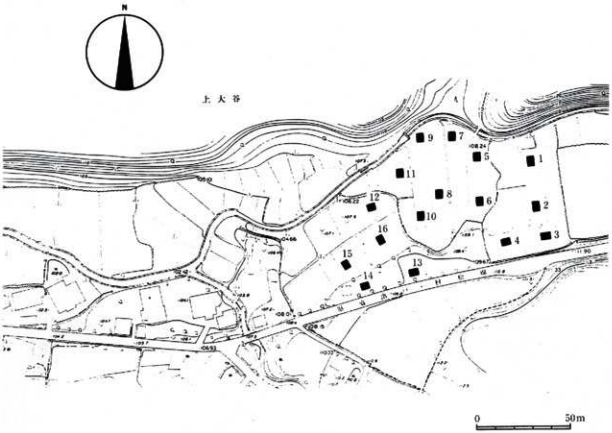
本地点の土層は、地山面が砂・礫層で表土からも浅く、遺構・遺物ともにまったく検出されなかった。大谷川旧流路ならびに氾濫原であったことが窺える。よって、遺跡の存在はほとんど考えられない状況であった。この結果から溜池造成工事には支障がないものと判断された。



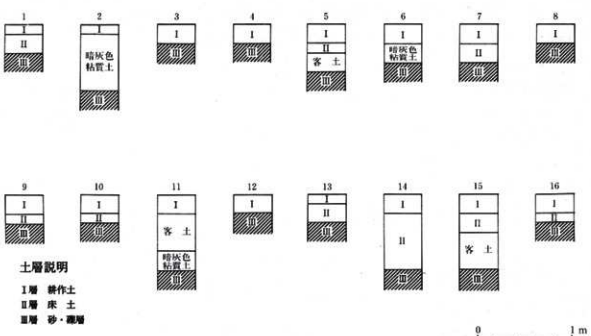
1　七谷忠魂碑遺跡(縄文)　2　芦沢の堰(中世)　3　石高山城跡(中世)　4　石山城跡(中世)
5　七谷城跡(中世)　6　木戸口墓標(中世)　7　薬師堂の宝篋印塔(中世)
8　宮の下の宝篋印塔(中世)　9　宮ノ谷地の堰(中世？)　10　岩野遺跡(古代・中世)
11　たて屋敷遺跡(中世)　12　草生津遺跡(縄文)　13　蚊口太遺跡(縄文)　14　田中屋敷遺跡(縄文)
15　寺屋敷跡(中世)　16　石五郎屋敷遺跡(古代・中世)　17　上大谷地内　18　山王原遺跡(旧石器)
19　堂淵の堰(中世)　20　善興寺の石造物(中世)　21　七聖３号塚(中世？)　22　七聖５号塚(中世？)
23　七聖４号塚(中世？)　24　伝下屋敷館跡(中世)　25　中丸の板碑(中世)　26　善興寺跡(中世)
27　高柳城跡(中世)　28　御所平遺跡(古代・中世)　29　金平遺跡(縄文)
30　二左衛門山墓跡群(中世)　31　七聖１号塚(中世？)　32　七聖２号塚(中世？)
33　川向遺跡(縄文)　34　ナメ板の堰(中世)　35　西山城跡(中世)　36　三場Ｂ遺跡(縄文)
37　三場Ｃ遺跡(縄文)　38　三場Ａ遺跡(縄文)　39　宮寄上板碑群(中世)　40　宝生院跡(中世)
41　隈訪神社前遺跡(縄文・中世)　42　小乙の宝篋印塔(中世)　43　広田Ａ遺跡(縄文)
44　広田の堰(中世)　45　牛ヶ沢Ｂ遺跡(旧石器・縄文)　46　牛ヶ沢遺跡(縄文)

第７図　上大谷地内・草生津遺跡と周辺の遺跡（Ｓ＝１／25,000）

国土地理院発行地形図「加茂」平成２年・「越後白山」平成３年　１：25,000を合成



第８図　確認調査トレンチ設定図（S＝1／2,000）



第９図　土層柱状図（S＝1／40）

Ⅳ　草生津遺跡

1．調　査　地　加茂市大字中大谷字草生津471ほか

2．調査期間　平成７年10月30日～11月13日

3．調査面積　調査対象面積約5,000㎡　実質調査面積約65㎡

4．調査に至る経緯

本遺跡は、昭和60～61年度に実施された詳細分布調査の際、発見された周知の遺跡である。今回の調査前の踏査でもフレーク数点が採集できた。小規模ながら縄文期の遺跡と把握されている。先述した、県営中山間地域農村活性化総合整備事業に係り本遺跡地内で農業集落道路建設が計画され、現在砂利道の両脇拡幅部分を調査対象としてほしい旨、三条農地事務所から依頼があった。

三条農地事務所は、平成７年10月２日付け三農地第749号で文化財保護法第57条の３第１項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を文化庁長官宛行い、市教委はその後、土地所有者への説明会を実施し、承諾書を得て、平成７年10月18日付け民資113号で文化財保護法第98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官宛に行い、調査の準備に入った。

5．遺跡の位置と環境

本遺跡は、加茂川とその支流である大谷川の合流地点から東に約1.7㎞入った、大谷川左岸の段丘上に位置する。標高は約80ｍで、大谷川を挟んで北側低地部との比高差は約７ｍである。本地域は加茂川支流域沿いでは、比較的縄文期の遺跡が多く確認されているところで、同じ大谷川左岸の段丘上には、蚊口大遺跡（13）や田中屋敷遺跡（14）が確認されている。それぞれ詳細な時期は不明であるが、地形条件や類似した表採遺物（フレークなど）からそれぞれ同様な性格の遺跡であった可能性がある。今後も同一段丘上の詳細な踏査が必要である。

なお、七谷各所の縄文期の遺跡で、表採や工事中の不時発見などで、かなりの土器・石器などが出土しているが、発掘調査された遺跡としては、七谷忠魂碑遺跡（１）・牛ケ沢Ｂ遺跡（45）がある。

また、現況は、かなりの改変があったとされるが、水田・畑地となっている。

6．発掘調査の概要

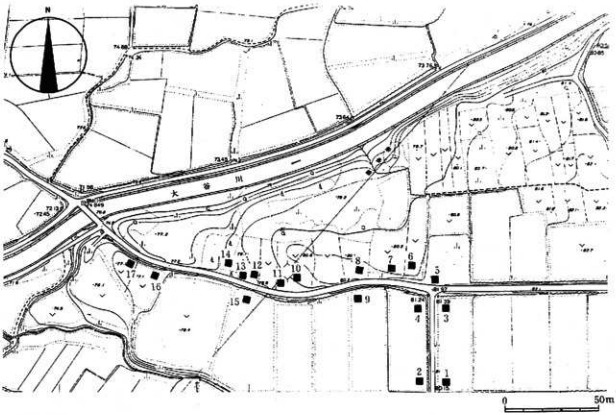
調査は、開発計画用地内に任意のトレンチ（２×２ｍ・２×１ｍ）を17箇所設定し、人力にて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。

なお、埋め戻しには、水田部のみ砂を入れて転圧し、耕作などに支障のないよう留意した。

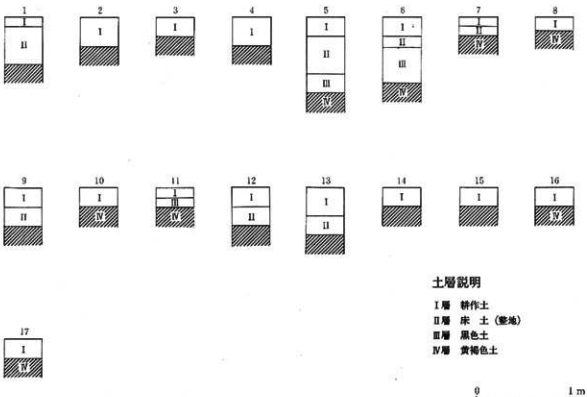
7．調査の結果

本地点の土層は、Ⅰ層耕作土・Ⅱ層床土で、地山面まで概して浅い。また、水田部分と畑地の一部分については、すでに整地工事が実施されたとのことで、旧地形ならびに原初の土層堆積状況を示していないことが考えられた。５～８・10・11・16・17トレンチ周辺部では、地山面が黄褐色系のローム層であったことから、未撹乱と考えられたが、10・11トレンチにて径約20～30㎝、深さ約20～70㎝の円形のピットが２基検出されるも、その他に遺構・遺物は未検出であった。

以上から、本調査区域においては遺跡が営まれた確実な痕跡は検出できず（あるいは破壊されている）、道路拡幅工事には支障がないものと判断した。しかし、特に地山面が黄褐色系のローム層を呈する区域を中心に遺跡が存在する可能性が高く、該当区域については慎重工事を、そしてより周辺部での開発行為に関しては、さらなる確認調査が必要である。



第10図　確認調査トレンチ設定図（S＝1／2,000）



第11図　土層柱状図（S＝1／40）

V まとめ

本年度から計画的に開始された、市内遺跡確認調査は3遺跡を対象に行った。上条地区の宅地造成事業関係で屋敷田遺跡が、大谷地区の圃場整備事業関係で上大谷地内と草生津遺跡が調査された。

屋敷田遺跡では、旧来から遺跡の存在は予想されていたものの、確実性が低かった。しかし、今回の調査で中世期の遺構・遺物を検出したことから、確実に遺跡であることが実証されたと言える。本遺跡北側丘陵上の上条城跡より、年代的には先行する可能性が高いが、山城との関連性もさることながら、上条地区の中世史の一端が顔を出したことは大きな意義があろう。今後は周辺の古代～近世の遺跡を考慮しつつ、遺跡の持つ性格などについて検討していきたい。また、本調査地点周辺についても、遺跡範囲拡大ないしは新たな遺跡の存在が十分予想されることから、各種開発計画が当該地に及ぶ場合は詳細な確認調査を実施していくことが必要である。

上大谷地内は、近接する石五郎屋敷遺跡との関連性があるかどうか注目されたが、地形的に氾濫原性低地であることや、遺構・遺物が皆無であったことから遺跡は存在しないものと判断された。

草生津遺跡は、本調査地点周辺部にてフレークなどの遺物が採集可能であったが、今回の調査地では、性格・時期ともに不明なピットを2基検出しただけであった。遺跡本体の遺構空白域ないしは周辺部とも考えられようが、後世の耕作や土地利用形態の転化などによる攪乱も考慮する必要があろう。しかし、なお遺跡の性格・範囲など不明な部分が多く、周辺部の開発に十分注意し、今後も確認調査を実施する必要がある。

いずれにしろ、今回の調査で、工事実施前の本発掘調査が必要と判断されたのは屋敷田遺跡のみであり、上大谷地内、草生津遺跡においては工事着工に支障はないと判断した。

【引用・参考文献】

安藤正美　1994　『見附市遺跡分布・確認調査報告書』　見附市教育委員会

伊藤秀和　1993　『牛ケ沢B遺跡』　加茂市教育委員会

伊藤秀和　1995　「加茂市における中世の遺跡について（一）」　『加茂郷土誌』第18号
加茂郷土調査研究会

加茂市史編纂委員会　1975　『加茂市史　上巻』　加茂市

加茂市史編纂委員会　1975　『加茂市史　下巻』　加茂市

川上貞雄　1986　『七谷忠魂碑遺跡』　加茂市教育委員会

川上貞雄ほか　1987　『東部地区遺跡詳細分布調査報告書』　加茂市教育委員会

関　正平　1986　「加茂市」『新潟県の地名』日本歴史地名体系第15巻　平凡社

鈴木邦夫ほか　1984　『新潟県中越地域土地分類基本調査　加茂』　新潟県農地部農村総合整備課

田中耕作・鶴巻康志　1990　『三光館跡・宝積寺館跡』　新発田市教育委員会

永井久美男編　1994　『中世の出土銭－出土銭の調査と分類』　兵庫県蔵銭調査会

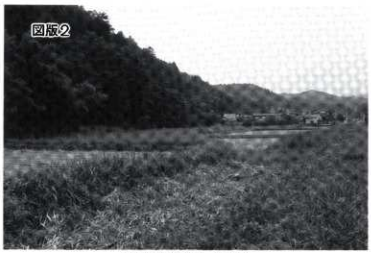
鳴海忠夫　1994　「加茂市上条城跡について－要害の縄張りを中心として－」　『加茂郷土誌』第17号
加茂郷土調査研究会

新潟県教育委員会　1987　『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』

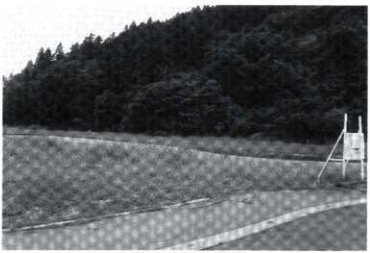
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

屋敷田遺跡周辺の空中写真

図版2



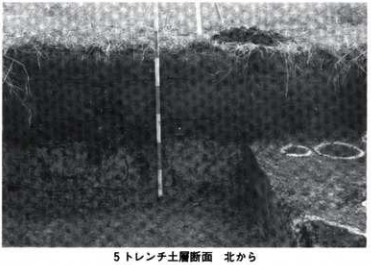
屋敷田遺跡遠景　西から



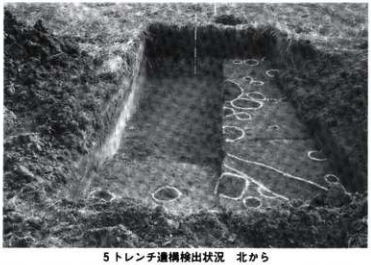
屋敷田遺跡近景　東から

調　査　風　景

3トレンチ　北から

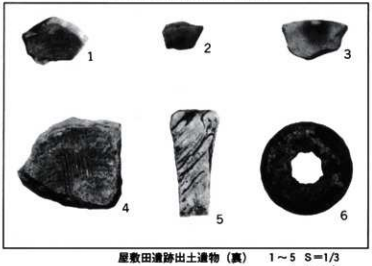


5トレンチ土層断面　北から

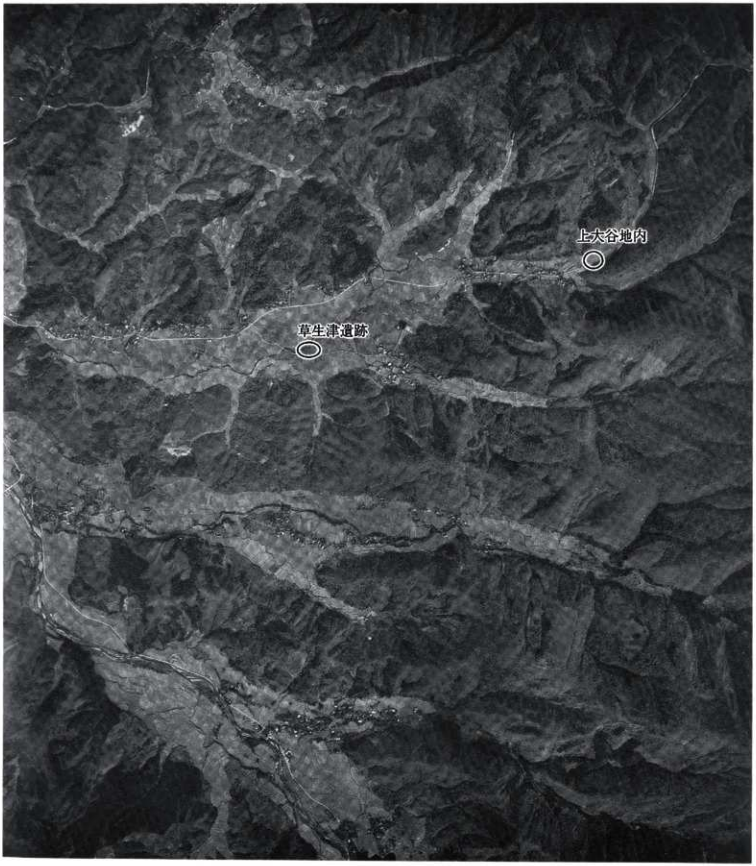


5トレンチ遺構検出状況　北から

屋敷田遺跡出土遺物（表）　1～5　S＝1/3
6　S＝1/1

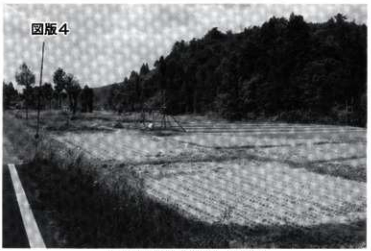


屋敷田遺跡出土遺物（裏）　1～5　S＝1/3
6　S＝1/1



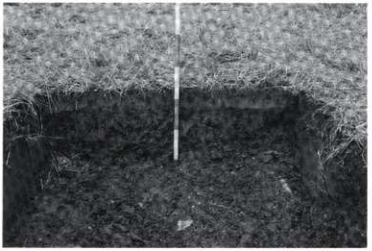
大谷地区周辺の空中写真

図版4

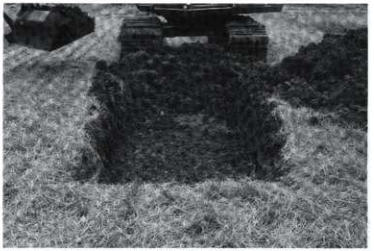


上大谷地内調査区近景　東から

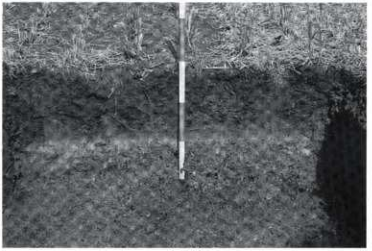
調　査　風　景



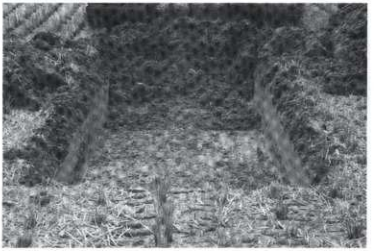
1トレンチ土層断面　南から



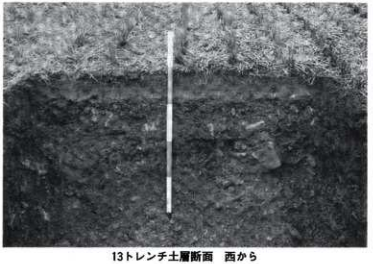
1トレンチ　北から



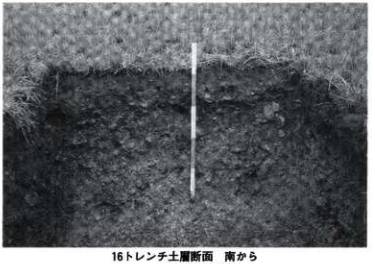
7トレンチ土層断面　南から



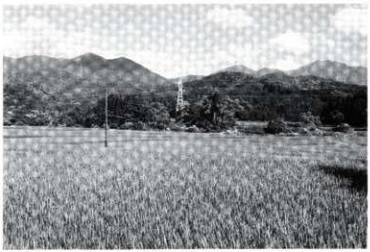
7トレンチ　北から



13トレンチ土層断面　西から



16トレンチ土層断面　南から

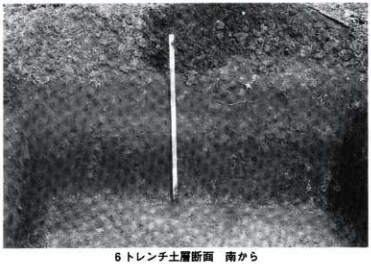


草生津遺跡遠景　北から

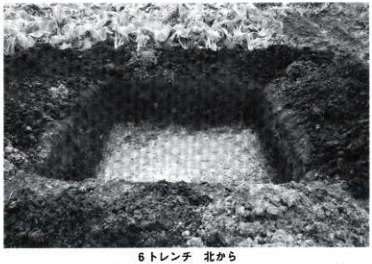
草生津遺跡近景　東から

調　査　風　景

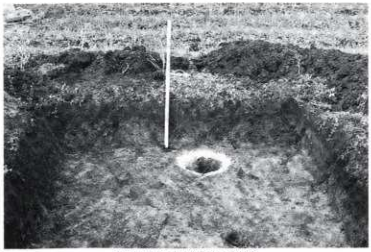
調　査　風　景



6トレンチ土層断面　南から



6トレンチ　北から



10トレンチ土層断面　南から

11トレンチ　北から

報告書抄録

ふりがな	かもし　　やしきだ　　かみおおたに くそうず
書名	平成７年度　加茂市内遺跡確認調査報告書　屋敷田遺跡・上大谷地内・草生津遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	加茂市文化財調査報告（６）
編著者名	伊藤秀和
編集機関	加茂市教育委員会
所在地	〒959－13　新潟県加茂市幸町２丁目３番５号　☎（0256）－52－0080
発行年月日	西暦　1996年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
やしきだ 屋敷田遺跡	かもしおおあざじょうじょうあざやしきだ 加茂市大字上条字屋敷田 722-1	15209	66	37度 39分 24秒	139度 4分 10秒	19961016・ 17	60	宅地造成事業
かみおおたにちない 上大谷地内	かもしおおあざかみおおたにあざちいわい 加茂市大字上大谷字沢相 242 ほか	15209		37度 36分 55秒	139度 8分 41秒	19961023・ 24	160	県営中山間地域農村活性化総合整備事業
くそうず 草生津遺跡	かもしおおあざなかおおたにあざくそうず 加茂市大字中大谷字草生津 471 ほか	15209	70	37度 36分 41秒	139度 7分 37秒	19961030～ 19961113	65	県営中山間地域農村活性化総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
屋敷田遺跡	包蔵地	中世	土坑・溝	土師器、珠洲焼、砥石、古銭	
上大谷地内			なし	なし	
草生津遺跡	包蔵地	縄文時代	なし	なし	

発行日　平成８年３月31日

加茂市文化財調査報告（６）

平成７年度　加茂市内遺跡確認調査報告書

屋敷田遺跡・上大谷地内・草生津遺跡

発行者　加茂市教育委員会
新潟県加茂市幸町２丁目３番５号
TEL　0256－52－0080

印刷所　株式会社小野塚印刷所
新潟県加茂市新町１丁目５番16号
TEL　0256－52－0056